

平成31年2月15日

第3回二本松市未来戦略会議 資料

「第2、第3の朝河貫一を育てる！」

政策研究大学院大学
名誉教授 黒川 清

1 二本松の課題

- 1.1 平成30年間で起こったことは、世界を揺るがす大きなパラダイムの大変化。それは、「冷戦の終わり」と「ネットのつながりの始まり」。
- 1.2 日本はこの30年経済成長していない。世界で収入格差は大きく広がり始めた。経済先進国では中間層の収入が伸びなくなった。
- 1.3 従来の製造業は途上国へと移る。
- 1.4 そのほかの背景で、日本の課題は、中間層の停滞、失望、少数の百万長者の出現、地方の衰退。
- 1.5 少子高齢長寿社会

2 二本松の特徴：特徴を生かす

- 2.1 地方の疲弊は全国共通の問題。二本松に特有の課題ではない。
- 2.2 この10年での二本松の特徴は？
- 2.3 東日本大震災という未曾有の大事件の被害を受けた東北三県の『一つの「市」』であること。
- 2.4 その中でも宮城、岩手との違いは、フクシマ事故という未曾有の出来事の被害を受けたこと。

3 ではどうするのか—福島県の中での他との違いを生かすしかない。「差別化」だ。

- 3.1 「市」であること。
- 3.2 放射能拡散の被害を受けていること。
- 3.3 ほかにない特産物があるのか？
- 3.4 福島、東北の被害を受けた三県にはない地理的優劣は何か？
 - 3.4.1 福島県のなかでの優劣は何か？「市」であることは？他の「市」との比較は？

- 3.4.2 国内外の姉妹都市のリストは？その関係では何をしていたのか？では何ができるか
- 3.4.3 学生や若者たちのネットワークはあるか？それは何か？何が他より際立っているか？
- 3.4.4 大学などの役割りは何か？福島大学、福島医科大学、会津大学などなど

4 差別できること、特にグローバルの世界での特徴

- 4.1 東北三県ではあの悲惨事をうけて「国内外の人たち」による新しいかたちのすばらしいビジネス、連携などが起こっている。それらは何か？連携はできないのか？
- 4.2 例として、気仙沼ニッチング、GRA、などなど。これらの連携モデルを考え、二本松経由でさらに世界に広げられないか？

5 もっとも際立ったほかの県、街、市などにはない二本松に唯一に近い「コト」、「モノ」は何か？

- 5.1 戊辰戦争の歴史から？ 「開城と落城」、何ができるか？
- 5.2 朝河貫一のレガシー：このほぼ30年にわたるダートマス大学とハノーバー町、イエール大学への中高生の訪問と連携は世界のどこを探してもない、二本松にしかない大きな価値、財産。
- 5.3 これを生かす。この「OB-OG」のクラブを生かす。そのためには今、そしてそれからの生徒の一人でもいいからこれらの大学へ進学を目指す、そしてその支援。つまり、第2、第3の朝河のような世界的人材を育てるのだ。
- 5.4 支援の資金は？ プログラムとしての二本松市の予算、東邦銀行（福島事故でお金がたまっている）、そのほかの奨学金など（セブン銀行）など。
- 5.5 この二つの大学とのOB-OGを中心に、何かの企画を始める。福島の大学との学生の交流などなど。学校、大学の本体だけではできないことを二本松市が仲介する。

フォローアップすべきこと。

6. これらの企画、プログラムの国内外へのPR。